

1. “個人”の自立に協力したい～子どもたちの将来に希望を～

幼い難民を考える会（CYR）は、タイ国境でカンボジア難民を支援していた「カオダイ
ン難民キャンプ」に保育者の女性たちが訪問し、子どもたちが適切なケアを受けていない現
状を目の当たりにしたことを契機に、1980年に発足し、カンボジアの子どもたちと農村の
女性のよりよい生活を支える活動を続けています。相手の自立を妨げ、相手を管理する体制
に陥らないよう、独立した人格である子どもたちが自立を達成するために協力したいと考
え、会の名前を「助ける会」ではなく「考える会」としました。

1970年以降、カンボジアでは20年以上内戦が続き、ポル・ポト政権下（1975～1979年）
では、教育や伝統文化が否定され、知識層の人々が虐殺の対象となりました。戦禍を逃れよ
うと国境を超え、やっとの思いで難民キャンプにたどり着いた人々からは、暗い過去を引き
ずり将来が見えない不安が感じられました。そのような状況でも成長を続ける子どもたち
が、人間らしい環境と必要な配慮のもとで暮らせるように、CYRは難民キャンプ内に「希
望の家」と名づけた保育センターを開設しました。50人のスタッフが働き、当初100人程
度が通っていた幼児とその保護者は、300人までにもなりました。運営責任者、保育者、指
導者を務めるのはカンボジア人で、日本人はサポートに徹することを心がけて活動しまし
た。カオダイン難民キャンプが1993年に閉鎖されるまでの13年間、8,000人以上の子ども
たちが遊び、学びました。

内戦が終結し、カンボジア政府は内戦により廃止された教育制度を再整備し、就学率の向
上に取り組んできましたが、幼児教育の整備は遅れ、今でも十分に普及・充実しているとは
言えない状態です。CYRは、幼児期を「人生の基礎をつくる大切な数年間」と考え、内戦
終結後25年にわたり、厳しい境遇におかれている子どもたちの健全な成長を支援し、子ど
もたちが幼児期に適切な教育を受けることで将来の選択肢を増やせるよう、カンボジア全
土の幼児教育の拡充に取り組んできました。また、伝統的な織物技術の復興と、農村部に暮
らす女性たちの経済的自立を目的とした織物事業も行っています。

（特定非営利活動法人幼い難民を考える会）

